TAKUMI ART NEWS
制作発行：画廊 匠　1987年12月８日　No.20
画廊 匠　宜野湾市大山３１２番地
Phone 09889(7)7981

87企画—11　仲間伸恵展　12月８日㈮—12月27日㈰（月曜休廊）

GALLERY TAKUMI

紙の変容――
仲間伸恵の世界

翁長 直樹

80年代、現代美術は急速に拡散し、現象的には華やかな「アート」の時代になった。

沖縄においても若手作家が旧来のジャンルに捉われず、自由に作品を作り、発表するようになったが、真に作り手の感性と思考が問われてくるのは、これからだと思える。

仲間伸恵はこれら新進の若手の一人であり、紙を素材にした作品をつくっている特異な作家である。今まで支持体として使われていた紙を前面に押し出してきたもので、紙による造形というより、紙のもつ物質性や、背後にある（自然）とでも言うべきものへの共感が表現の核となっている。

仲間の作品づくりは手の感性に委ねられていて、作品の形はつくる中で決定されていく。和紙をいったんばらばらに解体し水につけてもう一度再生するのであるが、その過程で土や植物染料などで染めるように彩色し、ぬらした紙や、どろどろになった紙を織るように重ねていく。作品によっては麻糸を縫うように入れる。糊は一切使わず和紙が本来持っている粘着力をそのまま利用している。作品は一枚の布や、まるでクモの巣、あるいは蓑笠を連想させ、壁から数センチ離して展示される。全体として色彩は抑えられ、紙の素材感が強調されて、画廊の微かな空気の動きにゆらゆら反応する。作者によれば、和紙を透明感のあるものとないものに使いわけており、染料は植物染料を、顔料は自然の岩石や土を使っているということである。作品は織りの構造を取り入れたものとそうでない紙の材質感を全面に押し出したものに分けられるようだが、共通していることは、縁をまるで手でちぎったようにあいまいな形にし、ところどころ紙が剝がれたように見せ、より自由で解放された仕事を目指していることである。

沖縄における美術の中でも今回の展示会はかなり異色であり、「見る」ことより、「つくる」ことをかなり意識させた作品となっている。和紙のもつ本来的な構造をいったん解体し、手を加えて再生させるという「つくる」工程を見せていると思われるからである。

和紙に対してもつ我々のイメージはやはり日本の伝統的イメージであり、例えば襖や障子、墨絵などであろう。仲間はそのような旧来の和紙に対するイメージをずらして変えて見せながら、強く自然を意識させる作品にしている。しかもそれは、どちらかといえば無秩序な荒々しい自然であろう。

仲間の作品には素材である和紙自体のもつ繊細さと、作品の荒々しさのアンビバレントな魅力がある。作者のもつ自らの神話的風土へのこだわりを美術という約束ごとに移しかえていくときのためらいと決断。それが身体(手)を通じて現前したといえるだろう。

■ 仲間 伸恵 プロフィール

1963　沖縄県平良市生まれ
1986　琉球大学教育学部美術工芸科卒業
1986　三人展“表面から物質へ”画廊沖縄
1987　琉球大学研究生修了
1987　個展　画廊 匠
1987　個展　沖大市民ギャラリー
1987　個展　画廊 匠
　　京都市立芸術大学大学院在学中